慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	時間の社会学の展開：「近代的時間」観をめぐって
Sub Title	Development of sociology of time : implications for "modern time conception"
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.79 (2015.) ,p.83- 97
JaLC DOI	
Abstract	In this study, I aim to historically reconstruct the sociology of time from the perspective of how its authors have grasped time conception peculiar to modern society. Thus, the following two findings can be deduced ; first, the history of sociology of time can be described as the history of "two-step relativization" against the modern conception of time. In short, until the 1960s, theorists such as Émile Durkheim attempted to relativize modern time conception by revealing other temporalities. Since the 1970s, theorists such as Anthony Giddens and Eviatar Zerubavel have attempted to elucidate the conception itself. Second, I clarify that authors of the sociology of time have described the following three characteristics of modern time conception—measurability, abstractness, and linearity. Simultaneously, however, in considering these characteristics, sociology of time has lacked a theoretical framework. On the basis of implications from Barbara Adam, Warner Bergmann, and Hartmut Rosa's works, I consider this absence as the primary problem of sociology of time. Consequently, I introduce Yusuke Maki's four-quadrant schema, which can explain modern time conception's three characteristics through a single theoretical framework as a solution to the aforementioned problem.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000079-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時間の社会学の展開

――「近代的時間」観をめぐって――

Development of Sociology of Time:

Implications for "Modern Time Conception"

鳥　越　信　吾*

Shingo Torigoe

In this study, I aim to historically reconstruct the sociology of time from the perspective of how its authors have grasped time conception peculiar to modern society. Thus, the following two findings can be deduced; first, the history of sociology of time can be described as the history of "two-step relativization" against the modern conception of time. In short, until the 1960s, theorists such as Émile Durkheim attempted to relativize modern time conception by revealing other temporalities. Since the 1970s, theorists such as Anthony Giddens and Eviatar Zerubavel have attempted to elucidate the conception itself. Second, I clarify that authors of the sociology of time have described the following three characteristics of modern time conception—measurability, abstractness, and linearity. Simultaneously, however, in considering these characteristics, sociology of time has lacked a theoretical framework. On the basis of implications from Barbara Adam, Warner Bergmann, and Hartmut Rosa's works, I consider this absence as the primary problem of sociology of time. Consequently, I introduce Yusuke Maki's four-quadrant schema, which can explain modern time conception's three characteristics through a single theoretical framework as a solution to the aforementioned problem.

Keywords: Modern time conception, Social Time, Sociology of time, Social theory.

1.　問題の所在

本稿は，日常生活者としてのわれわれにとってきわめてなじみ深い，計量可能で抽象的，そして直線的な性質において観念される時間観について，社会学のパースペクティブから接近を試みるものである。I. カントはかつて「時間そのものはそれだけでは知覚されることがかなわない」（Kant［1781, 1787］1926＝2012: 239）とし，それゆえに「私たちは時間を……一本の線の形象のもとにその線を引くかぎりで私たちに表象しうるものとするほかはなく，そのような表示のしかたをとる以外には，時間を

* 慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員（shingo1985@msn.com）

測定する単位をまったく認識することができない」（Kant［1781, 1787］1926＝2012: 178）と述べた。カントが看破したこの時間の性格は，今日におけるわれわれの時間感覚にも変わらず通底している。われわれは通常，時間と聞いたときにはまず際限なく分割可能な数直線のようなものを思い浮かべるだろう。「時間がない」と焦る時，あるいは「暇だ（時間がありすぎる）」と退屈する時，われわれが意識しているのは，直線上の正の方向に置いた任意の点t1に対して，自分のいる現在t0がどれだけ距離をもっているかである。さらに，友人と約束をする時，われわれは2014年11月30日の午後1時という数直線上の点が，その約束をしている友人とも共有されていることを何の疑いもなく自明視している。われわれの生活はこの時間による相互調整に根本的に依存しており，それゆえこの時間の観念なくして社会生活は決して成立しない――かつてG.ジンメルが次のように述べた通り。

> ベルリンのすべての時計が突然狂って異なった方向へ進めば，たとえそれがたんに一時間のみであるにしても，すべての経済的その他の取引生活は，長きにわたって混乱するであろう。……大都市の生活の技術は，すべての活動と相互関係とが確定した超主観的な時間表にきわめて正確に配列されるのでなければ，けっして考えることができないのである。（Simmel［1903］1957＝2004: 273）

このような時間観は，われわれの日常生活世界のあらゆる領域を覆いつくした，普遍的な観念であるようにみえる。

本稿の目的は，このような時間の捉え方――様ざまな表現があるが，本稿ではこれを便宜的に，後で述べる理由から「近代的時間」と呼びたい――に対して，これまでの社会学がどのように態度決定をしてきたかを概観することにある。時間論といえば通常，自然科学とりわけ物理学におけるそれや，哲学におけるそれが頭に浮かぶだろう。しかしながら社会学においても，その黎明期から時間についての思索は存在する。本稿では，これまでの「時間の社会学（Zeitsoziologie）」（Bergmann 1983: 470）の営みを整理し，このわれわれの生活に支配的な時間観がそのなかでどのように論じられてきたのかを示すものである。

こうした方途を採ることの第一の意義は，現時点での時間の社会学の状況に関わる。時間の社会学についてはその学説史的な整理がすでにいくつかなされているが（Bergmann 1983; Pronovost 1989; Adam 1990＝1997; Šubrt 2001），本稿と同様の観点からその学説史を整理した研究は存在しない[1)]。しかしながら，上で述べたような時間観は後述するように近代社会に固有の，しかもその最も際立った時間観であるがゆえに，「近代の自己認識の学」（友枝1998: 8）として展開してきた社会学にとって――明示的であるか否かは措いて――つねに問題的であり続けてきたといってよい。したがって，時間の社会学の主要な問題系を成す「近代的時間」の把握様式という観点から時間の社会学の学説史を整理し，その展開状況を明示することは，少なからぬ意義をもつ研究の方途であると考えられる。

また第二の意義は，現時点での我が国における時間の社会学の状況に関わる。近年の社会学において，時間という主題はますます重要視されるようになってきている。欧米の社会学界では時間というテーマのもとで，すでにいくつかのまとまった研究が提出されているし（Adam 1990＝1997; Hassard 1990; Nowotony 1992），周知の通り社会理論の文脈においても，時間的観点を考慮することの重要性は再三にわたって指摘されてきた（Giddens 1979＝1989; Giddens 1981a; Harvey 1990＝1999; Urry 1994; Urry 2000＝2006）。さらに，*Time and Society*（1992 ～）という社会科学の時間論に特化した専門誌

さえ存在する。「時間の社会学は今日，社会学分野において独立したディシプリンをもつ一つの類型とみられている」（Šubrt 2001: 217）というŠubrtの言は，こうした時間の社会学の現状を端的に表現しているといえる。しかしながら我が国の社会学においては，こうした欧米における時間の社会学の展開がいまだ断片的にしか知られていないように見える[2)]。これをふまえて本稿の第二の意義は，欧米においてはすでに精力的に展開されている時間の社会学を，きわめて限定的な視角からではあるが整理し，我が国に紹介することに求められる。

2. 「近代的時間」をめぐる時間の社会学の展開

2-1. 「質的な時間」の探求

時間という主題はつねに，社会学において十分な蓄積がない問題領域であるとされてきた。社会学者が時間について言及する場合はほとんどつねに，時間がいかに社会学において等閑視されてきたかについての嘆息からはじまる（Giddens 1981a; Zerubavel 1981＝1984; Bergmann 1983; Adam 1990＝1997; Hassard 1990; Urry 2000＝2006）。しかしながら，先にも述べたように，社会学にもすでに時間についての研究が――断片的なものも含め――存在する。本章ではこの流れを振り返ってみよう。

その前にまず，19世紀以降の諸学における時間論の全体的な流れとして，「近代的時間」の相対化の傾向性の存在を指摘しておく必要がある。時間の社会学の登場までに，近代科学が「近代的時間」を唯一の時間として素朴に前提してきたこと，しかしながらそれが唯一の時間観ではないこと，こうしたことが次第に明らかになってきていたのである。たとえばH. ベルクソン，E. フッサールやM. ハイデガーらは，周知の通り「持続」，「内的時間意識」や「本来的な時間性」といった時間性に大きな注意を払ってきた。その際これらの時間性は，本稿が「近代的時間」と呼ぶ時間観（彼らはそれを「空間化された時間」「客観的時間」「通俗的時間概念［ないし「今時間」］等々と呼ぶ」とは異なった，それには留まらない別の時間性として，「近代的時間」の相対化の根拠として位置づけられてきたのである[3)]（Bergson 1889＝1975; Heidegger［1927］1993＝2013; Husserl 1928＝1967）。

時間の社会学もまた，こうした「近代的時間」以外の別の時間性の探求，という同時代の諸学の傾向性と軌を一にする仕方で，時間への探求を始めたといってよい。P. ソローキンとR. K. マートンによる指摘にみられるように，時間の社会学の出発点には，「ニュートン時間〔＝「近代的時間」〕の偶有的な性格」（Sorokin and Merton 1937: 616, 括弧内は本稿筆者）という認識が，すなわち「時間が客観的であることに関して，おそらくもっとも確たる主張をなして」いた「単一で，際限なく分割可能で，連続的であるというニュートンによる時間概念の定式化」だけが「唯一のありうる時間概念ではないこと」という認識が，存していたのである[4)]（Sorokin and Merton 1937: 616）。

さまざまな論者から指摘されているように（cf., Bergmann 1983; Pronovost 1989; Hassard 1990），時間の社会学はE. デュルケームの『宗教生活の基本形態』（Durkheim 1912＝2014）をもってその嚆矢となす。周知の通り社会学の対象を，自然科学の対象とする自然的事物にも個々人の意識にも還元しえない「社会的事実」に求めたデュルケームによれば，社会学の対象としての時間もまた「社会的事実」としての性格を有する。すなわち時間とは，一方で自然科学の「絶対時間」のような普遍的な時間ではなく，社会集団毎に異なった様相において現出するいわば相対的な時間である（cf, Durkheim 1912＝2014: 31）。また他方で，時間とはカントの考えたような自我の意識に先験的に属するカテゴリーではなく，人びとに外在的に経験される「非人格的な外枠」，すなわち「私の時間ではなく，同一の文明に属

する万人によって客観的に思考されるような時間」である（Durkheim 1912＝2014: 30–31, 強調は原著者）。デュルケームの重要性は，まず何よりも自然科学的な時間とも異なった，しかし他方で哲学的な意識の時間とも異なった，社会学に固有の対象としての「社会的時間」の概念を切り出したことに求められよう。その後デュルケームの社会的時間の考え方は，およそ1960年代ごろまでのあいだに，フランスにおいてH. ユベールやM. モース，M. アルヴァックス，G. ギュルヴィッチといったデュルケームの影響下にある論者たちによって（Gadéa and Lallement 2001），またアメリカにおいてP. ソローキンとR. K. マートン，W. ムーアによって，様ざまな仕方で展開されていくことになる（Sorokin and Merton 1937; Moore 1963＝1974; Gurvitch 1964）。

かかる論脈では，近代社会における様ざまな時間のあり方が解明されてきた。ここではその端的な例として，デュルケームによる聖なる時間と俗なる時間との区別を挙げておこう。彼によれば，あらゆる社会には聖と俗との区別が備わっており，その区別のメルクマールは絶対的な「異質性」にある（Durkheim 1912＝2014: 81）。したがって，彼にもとづけば聖なる時間である儀礼などの時間は，俗なる時間としての日常と同じ時間帯に両立することが不可能である。このことにより聖なる時間は，連続的な俗なる時間に対して象徴的な分節を付与する機能をもつことになる（cf., Durkheim 1912＝2014: 31）。このように区切られた時間は，その社会に固有の「集合的活動のリズム」（Durkheim 1912＝2014: 31）をもつ。そしてこのリズムはといえば，量的に測定される連続的な時間経過にはとどまらない質的な性格を有する。社会的時間のもつこの質性は，「暦」のうちに端的に表現されている。たとえばC. ギアーツは，次のように暦を規定している。

> 暦とは時間を単位に区切るものではあるが，これは，区切られた時間を数えたり足したりするためにではない。それらを描写し特徴づけ，異なる社会的，知的，宗教的意味を与えるためになのである[5]。（Geertz 1973: 391）

この議論には，この時代の様ざまな時間の社会学のもつ一つの共通点が端的に表現されている。それは，自身の分析対象である「社会的時間」の概念を質的な時間として規定していることである。J. ハサードによれば，この時代の時間の社会学は，「社会的時間がクロックタイムとは分析上区別されるということを強調」し，自身の分析対象を明示的に前者の「社会的時間」に措定することにその主たる特徴をもつ（Hassard 1990: 5）。その場合に「社会的時間」と対置されるクロックタイムは，計量可能で抽象的な性格をもつ時間――本稿の用語法で言えば「近代的時間」――と考えられ，後で述べるように自然科学の対象として「天文学の時間」ないし「物理的時間」と同一視されている。彼らの主たる関心は，このような区別に立ったうえで，質的な「社会的時間」を社会学に固有の研究対象として捉え解明することにあったのである[6]（Sorokin and Merton 1937: 621; 辻2012: 4–5）。

2-2. 「近代的時間」の探求

前節では，デュルケーム以来1960年代ごろまでの時間の社会学が，「近代的時間」以外の別の時間性の探求という方向性をもって成立・展開してきたことをみてきた。

ここで強調されるべきは，そのさいに「近代的時間」という観念そのものは，時間の社会学の分析対象からは除外されてきたという事実である。先に述べたように，この時代の時間の社会学の多くは，「ク

ロックタイム＝ニュートン時間（＝「近代的時間」）」に対して，社会的時間を対置するという図式に立ったうえで，自身の分析対象を後者の社会的時間に措定していた。このことは，「近代的時間」を自然科学の対象に割当て，それゆえそれを社会学の対象からは除外してきたことを意味する（Nowotony 1992: 421–2）。

だが「近代的時間」そのものもまた，実際には一つの「社会的時間」である。すなわち，時間を同質的で，空虚で，計量可能な直線としてみる考え方はそれ自体，近代社会に固有内在的な考え方にほかならない。ギデンズは次のように述べている。

> 近代の文化においては，時間を，過去から現在に向かう一つの方向をもつような，何かしらの出来事の流れとみる傾向がある。また時間と空間はどちらも測定可能で，事物の存在とわれわれ自身の活動の生起という両者から分離できるとみてしまいがちである。……それは，ここ2, 3世紀に発展した西欧文化に限定された地平である。（Giddens 1987＝1998: 196）

もちろん，この時代までにもすでに先のギデンズの指摘に見られるような「時間が現実の社会的構成の一側面である」という認識は，社会学者たちのあいだで「共通の観点」であったと言える（Luhmann 1976: 134）。しかしながら実際のところ，1960年代ごろまでの時間の社会学は，「近代的時間」そのものよりもむしろそれとは別の時間性たる質的時間に主として目を向けていた。アーリはこれを次のように指摘している。

> クロックタイムは人間の創造物である。ところが，このクロックタイムこそが，自然的時間の決定的な特徴として，つまり歴史を通じて社会的時間から切り離されてきた時間として，社会科学が考えてきた時間にほかならない。（Urry 2000: 118＝2006: 209–10）

これに対して時間の社会学が「近代的時間」そのものを対象化し，それについて議論が積み重ねられるようになったのは，W. ベルクマンが時間の社会学という学問領域が成立したとみる1970年代以降に重なる（Bergmann 1983: 462）。それではなぜこの時期以降に「近代的時間」が時間の社会学の対象とみなされるようになったのか。その理由についてここでは次の二つを指摘することができる[7]。第一に，「自然と社会」という二元論そのものに対して，疑いの目が向けられるようになったことである。この方向[8]でもっとも包括的な研究を行なっているB. アダムは，社会学がニュートン，デカルト的な古典的自然観をいまだ前提としていることを批判し，近年の物理学や生物学における時間論の紹介を通して，社会学における「自然」観をアップデートするとともに，この二元論そのものの克服を企図している（Adam 1990＝1997）。またJ. アーリも，現代の時間のあり方を捉えるためにはこの二元論を脱し，自然科学の時間論を積極的に取り入れていくことが必要であると主張している（Urry 2000＝2006）。このような，それまでの時間の社会学がそれにもとづいて自身の探求対象を確定していた「自然と社会」という二元論そのものの妥当性の揺らぎは，「近代的時間」を「自然科学の時間」の側へと位置づけてきたそれまでの考え方の妥当性の揺らぎと直接的に結びついていると考えられる。

また第二に，同時代の社会理論の次のような動向が挙げられる。この時代に登場してきたA. ギデンズ，N. ルーマン，P. ブルデューらのいわゆる「統合的な社会理論」（西原1998: 115）は，それ以前の

社会理論においては時間問題が等閑視されていたという一つの共通認識の上に立っていた。たとえばギデンズは，「時間と空間が，社会生活の“環境”となっているという考えは，とりわけ，学問間の分業を強化してきた。それゆえ，時間は歴史家たちの，空間は地理学者たちの最大の関心事とみなされ，それ以外の社会科学はこの次元を考えることを，みごとに無視してきたのである」（Giddens 1987＝1998: 195）とし，この時代までの社会学が時間問題を等閑視していたことを批判する[9]。1970年代ごろに社会理論の文脈で，それまで不問の前提としてきた時間の問題を問いなおそうとする気運が高まったこと，この流れは，時間の社会学が1970年代以降に，それまでの時間の社会学が十分には問うてこなかった「近代的時間」を，近代に固有の社会的時間として対象化していったことと軌を一にすると考えられる。

3. 「近代的時間」の性質

3-1. クロックタイムへの着目：「計量可能性」と「抽象性」[10]

われわれはこれまで時間の社会学の学説史を概観してきた。時間の社会学は，それが「近代的時間」に対していかなる態度決定を行なってきたかという観点からいえば，いわば「近代的時間」に対する二段階の相対化として整理できる。第一に，「近代的時間」以外にも別の時間性がありうることが明らかにされ，そうした別の時間性を探求していった段階（1960年代ごろまで）。第二に，「近代的時間」そのものに対する対象化の段階（1970年代以降），これである。

それでは第二段階目における時間の社会学は，「近代的時間」をいかなるものとして描いてきたのか。第二段階目の時間の社会学の主たる特徴は，近代化に伴って生じたこの時間観そのものを，機械時計によって表現される時間である「クロックタイム」として描くことにある（Giddens 1987＝1998: 208）。技術史や社会史の分野ではすでに数多くの議論がなされているが[11]，機械時計の発明と普及がもたらした歴史的影響はきわめて大きい。それはL. マンフォードをして，「時計は，その産物が分や秒である一つの動力機械である。そしてその本質的な性質によって，時間を人間的事象から分離し，数学的に計測可能な系列という独立した世界……への信念をつくりだすのを助けたのである」，「近代の産業時代の鍵となるのは，蒸気機関ではない。それは時計である」（Mumford 1934: 14, 15＝1972: 27, 28）と言わしめるほどである。時間の社会学もまた，近代社会の成立・維持に多大な影響を与えた機械時計のありかたに着目しつつ，クロックタイムの探求へと向かった。以下では時間の社会学がこの時間をどのようなものとして規定しているのかをみていこう。

第一に，ほぼすべての時間の社会学が看破しているように，クロックタイムは「計量可能性（measurability）」という性格をもつ。退屈な宿題に辟易する時間と，恋人と過ごす楽しい時間は，それを体験している者からみれば互いにまったく異なった質をもつだろう。だが両者の時間は，時計のうえではたとえば同じ「一時間」として測定されうる。クロックタイムの主たる特徴の一つは，本来的にはこのように異質な性格を有する諸事象を，均質な「量」として計量化することにある。

この性質は，同じく本来的には異質な対象から成る世界を，計量可能な価値として編成していく媒体としての貨幣の機能を想起させる。断片的なものではあれK. マルクスがすでに（Marx［1847］1976: 127＝2008: 195），時間と貨幣とが類似ないし置き換え可能な関係にあることを論じているその最も深い根拠は，この計量性という両者に共通の特徴，つまり両者が近代に特有の「計算合理性（calculative

rationality)」(Thrift [1981] 1990: 105) の産物であることに求められよう。時間は近代に至って，貨幣のように，それにもとづいてあらゆる事象が計量される準拠枠として成立したのである。

ただし時間と貨幣とのあいだには一つの大きな相違がある。それは，貨幣はそれ自体体験に与えられうるものであるのに対して，本稿冒頭のカントからの引用にあるように，時間そのものは体験には決して与えられないことである。しかしながらわれわれは日常的に時間そのものをあたかも体験可能なモノのように扱い，それを「分割したり，節約したり，浪費したり，補充したり，抹殺したり，盗んだりすることができる」(Lynch 1972＝1974: 183) と考えている。

この「あたかもモノのように」という性質が，クロックタイムのもつ第二の性質である「抽象性 (abstractness)」にあたる。前近代の社会において，時間は自然の事物や個々の活動と緊密に結びついていた。鶏が鳴く時が起床の時であり，日が沈み農作業ができなくなる時が終業の時であった。これらの時間は，鶏の鳴き声や日没といった自然の出来事のうちに備わった具体的な時間であり，モノのように捉えられる時間ではなかった。これに対して近代社会においては，「自然界とはまったく無縁で，完全に抽象的であり，人間が実際に体験できるリズムとは関係のない」(Zerubavel 1981＝1984: 106) クロックタイムが，あたかもそのものとして体験可能であるかのような性質を備えて立ち上がってくることになる。

このクロックタイムは，次のような過程を経て成立した。すでに明らかにされているように，クロックタイムは当初，修道院という厳格な時間規律を必要とする領域に限定的に導入されたものであった (Mumford 1934: 12–4＝1972: 25–7)。だが，クロックタイムが修道院を端緒として学校，軍隊，工場，市場等々へと急速に浸透していくにしたがって，すなわち近代社会がこの時間を基準として編成される傾向が強まるにしたがって，やがてクロックタイムは，それが人為的に作り出されたという事情が忘れ去られ，物的な性格をもつものとして表象されるようになる。人びとはクロックタイムについて，「ほとんどが人為的な社会習慣に基づくものであるにもかかわらず，それを動かしがたいものだと感じるようになる」(Zerubavel 1981＝1984: 72)。さらにそのうえ，「この社会的に作り出された人工的な時間はあらゆるものを包含するようになり，その結果今では，それがあたかも時間そのものであるかのように，それ以外の時間が存在しないかのようになっている」(Adam 1992: 180, 強調は本稿筆者)。いわば時間の物象化的成立，これがここでの「抽象性」の含意である[12)]。

3-2. 「書き言葉」への着目：「直線性」

だがさらに，「近代的時間」はもう一つの性格をもっている。それが「直線性」である。近代社会を生きるわれわれにとって，時間を相互に独立した「過去」「現在」「未来」から成る直線としてみる，しかもそれをあたかも川のように未来から現在，過去へと流れゆくものとしてみる考え方は，きわめてなじみ深いものである。しかしながら文化人類学の知見が示すように，この考え方は前近代や非近代の社会にあっては自明のものではない (Whorf [1936] 1956＝1993: 13)。そうであれば，直線として時間を観念することはそれ自体，近代化に伴って生じたものであるといえる。すでにウェーバーが述べているように，未来へとまっすぐに前進 (進歩 [Fortschritt]) していく直線時間が生じたのは「脱呪術化 (Entzauberung der Welt)」という近代化の一要素を契機としてだったのである (Weber 1919: 488–9＝1980: 32–35)。

ウェーバーと同様に多くの社会学者は，「直線性」をもつ時間観の成立を，伝統社会の時間観と近代社会のそれとの区別のメルクマールとして捉えたうえで，「循環的時間から直線的時間へ」という仕方で両者のあいだの移行を特徴づけてきた（Adam 1990＝1997: 134）。だが実際には，時間の社会学のなかでこの直線性について集中的に言及した研究はそれほど多くはない。管見の限り時間の直線性については，クロックタイム論とは別の文脈において言及がなされている。一つには，書き言葉の変化との関連においてである。

ド・グラツィアによれば，時間を直線としてみる考え方は，「年代記（chronology）」にその基礎を置いているという（De Grazia 1974: 466）。彼によれば，歴史上の支配者たちは，自身を中心とした国を立ち上げるさいにつねに年代記を作成する傾向にあった。年代記とは歴史をまさしく直線において表現するものであり，このような歴史の捉え方が普及したことによって，時間を直線として捉える考え方――直線的な時間観はそれゆえしばしば「年代記的時間」と呼ばれる（cf., Kracauer 1969＝1977: 189）――が準備されたというのである。

このド・グラツィアの示唆において重要なのは，彼が年代記という「書き記された」歴史に，直線的時間の発生をみていることであろう。歴史を直線的に表現する年代記は，「様ざまな歴史的出来事を時間順序に従って配列した一種の年表」（野家［1996］2005: 127–8）であり，その配列に際して必要となるのは，出来事を文字でもって「書き記す」ことである。この文字を「書き記すこと」そのものに，直線的な時間観発生の契機をみているのがギデンズである。

> 書き言葉の発展が，それ以後の西洋の社会生活を特徴づける歴史性の基礎となった「直線的な時間意識（linear time consciousness）」の最初の出現の土台となっていると考えるのは，それほど非現実的ではない。……書き言葉が物質上の形態としてもつ直線性はまさしく，ある点「から」ほかの点「へと」と進んでいく継続的な過程として，時間の経過を意識することを助長するのである。（Giddens 1979: 201＝1989: 222）

すなわち，書き言葉はそれが用いられる際，基本的には横に（日本語の場合は縦に）一直線に書き表されるという性質をもつ。このような書き言葉の普及によって，直線的な時間観の発生は促されることになった。ギデンズはこのように述べているのである。

B. アンダーソンの『想像の共同体』の議論もまた，位相は異なってはいるがしかし同様の論点に関わる。アンダーソンによれば，出版技術（および識字率）の向上により，小説や新聞が世の中に急速に普及していくと，こうした媒体を通して「すべての行為が，時計と暦の上で同じ時間に，しかし，おたがいほとんど知らないかもしれぬ行為者によって行なわれているという……著者が読者の頭のなかに浮かび上がらせた想像の世界」（Anderson 1983＝2007: 51）が立ち上がってくる。言い換えれば，小説や新聞を通して，「均質で空虚な時間」のなかで同時的に結ばれた諸社会有機体が，そのなかを過去から未来へとまっすぐに進んでいくという「直線的な」時間観が浸透していくのである（Anderson 1983＝2007: 51; 浜2010）。このアンダーソンの議論は，時間の「直線性」の観念が，近代社会における書き言葉のありかたの変容を通して，広く人びとのあいだに普及していった局面について論じたものとして位置づけられる。

4. 二つの「近代的時間」論と真木悠介の四象限図式

前章でみてきたのは，時間の社会学が「近代的時間」を「計量可能性」「抽象性」そして「直線性」の三つの性格をもつものとして描いてきたことである。

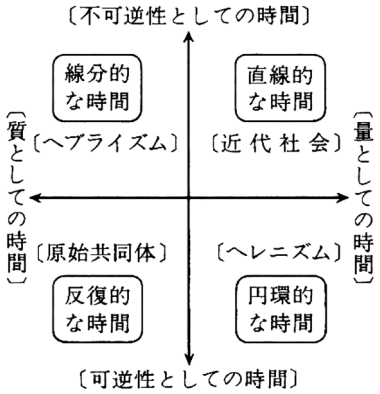
ただし実際には，前述したように，「近代的時間」を「計量可能性」と「抽象性」において捉えるクロックタイム論と，「直線性」において捉える議論とのあいだには隔たりがある。特に，アーリがクロックタイムの性格を「可逆的」として規定していることに端的に見られるように，時間の社会学において現勢的なクロックタイム論は，基本的には「近代的時間」が直線的な形状をもつとは述べない（Urry 2000＝2006: 201）。ギデンズのいうように，「時計は，近代文化において支配的と考えられがちな“直線的＝単線的”な時間概念とはあまり関係がない」（Giddens 1987＝1998: 197）と考えられているかのようである。

もちろんこうした両論脈のあいだの隔たりは，近代社会に特徴的な時間観を両者がどういった媒体を通して捉えているかという点での相違に帰着するともいえよう。一方は時計という機械装置を通して，他方は歴史等の記述様式を通して，近代社会に特徴的な時間を捉えているからである。そうである以上，両論脈がそれぞれ異なった時間を主題化しているという見方も，すなわち二つの「近代的時間」論がそこにはあるという見方もできる。

しかしながらわれわれはあえて，両論脈を架橋し，両論脈が別箇に捉えてきた「計量可能性」「抽象性」「直線性」のすべてにおいて「近代的時間」を把握することのできるパースペクティブを模索したい。その理由は第一に，冒頭で例示したような数直線としての時間観，言い換えれば「線分上の各点に様ざまな事件や出来事を時間的順序に従って配列することによって」できあがる「歴史の側面図」ないし「水平に流れ去る時間」（野家［1996］2005: 127, 182）としての時間観――これこそが近代社会の時間観のなかで最も際立ったものだと考えられる――を十全に理論的な射程に入れるためには，「近代的時間」を上の三つの性格を備えたものとして捉えることのできるパースペクティブが必要だからである[13]。

また第二に，時間の社会学の展開のためにも，このパースペクティブは必要である。時間というトピックをめぐって近年精力的に仕事を行なっているH. ローザによれば，既存の時間の社会学の問題は，研究の断片化にある。すなわち「時間の社会学が，相互に関連をもたず，累積的でもなく，また社会理論による諸々の試みとの接続を欠いていることによって完全に“独我論的な（solipsistische）”諸研究から成っている」ことにあるというのである（Rosa 2005: 20）。同様の批判はすでにベルクマンやアダム，多田光宏によってもなされている（Bergmann 1983; Adam 1990＝1997; 多田2013）。そうであれば，二つの「近代的時間」論をそのうえにまとめあげることのできる一つの土台を用意することは，この問題の解決のために必要な作業である。

以上をふまえて，われわれは最後に真木悠介による時間意識の類型論をとりあげる。真木は『時間の比較社会学』（真木1981）のなかで，原始共同体，ヘブライズム社会，ヘレニズム社会，そして近代社会の四つの社会に関する理念型を設定し，それらを「質的（具体的）」―「量的（抽象的）」の横軸と，「可逆的」―「不可逆的」の縦軸から成る下記の四象限図式にあてはめる。そのうえで真木は，四つの社会類型のなかで最も特徴的な時間観をそれぞれ，「反復的な時間」「線分的な時間」「円環的な時間」そして「直線的な時間」として規定している[14]。



図一（真木1981: 153）

この作品のなかでの真木の関心は，上図に沿っていえば，原始共同体の時間観から，ヘブライズム，ヘレニズム社会のそれを経由して，いかにして近代社会の時間観が立ち現れてきたのかを論証することにある。ただし，この論証の詳細な説明はここでは省かざるをえない。また，真木がこの図式を用いて企てた，時間の病理からの解放の契機の探求という彼に独特の立論についても，ここでは議論の俎上に載せることはできない。以下ではあくまでこの四象限図式の論理構成にのみ焦点化して，これと時間の社会学との関連づけを行なってみたい。

まず第一に確認しておきたいのは，上図において真木が近代社会に特徴的な「直線的な時間」（われわれの用語では「近代的時間」）を，最終的に「抽象性」「計量可能性」「直線性」の三つの性格において規定していることである[15]。真木にとって，「近代的時間」はこの三つの性格をすべて備えてはじめて「近代的時間」たりうる。真木によれば，たとえば「抽象性」と「計量可能性」だけをもつ時間観であれば，非近代社会のなかにもすでに見られるものだからである（真木1981: 180–1）。

そして第二に，この四象限図式には，これまでの時間の社会学における二つの「近代的時間」論がそれぞれに用いてきた枠組みがともに含まれていることを指摘しておきたい。この四象限図式は，先に述べたように「質的（具体的）」—「量的（抽象的）」の横軸と，「可逆的」—「不可逆的」の二つの軸から成る。そして実際のところ，これらの軸はそれぞれ，「近代的時間」に着目してきた既存の時間の社会学における二つの論脈が，それぞれ別箇に使用してきた枠組みにほかならない。というのも，時間の社会学は一方において，近代社会の時間を質的（具体的）ではなく量的（抽象的）なクロックタイムとして（横軸），また他方において，それを可逆的ではなく不可逆的な直線として捉えてきているからである（縦軸）。

それに対して真木は，両者の合成物として「近代的時間」を描いている。真木の図式は，これまでの時間の社会学における二つの「近代的時間」論の枠組みをともに含むものなのである。そうであれば，われわれはこの四象限図式を，二つの「近代的時間」論を架橋することのできる一つの土台として，位置づけることができる。

5. 終わりに

本稿は，時間の社会学の学説史を，それが「近代的時間」に対していかなる態度決定をしてきたかという観点から整理してきた。その結果明らかになったことは，第一に，時間の社会学の学説史は，近代的時間に対する「二段階の相対化」として描くことができるということである。また第二に，とりわけ二段階目の時間の社会学において，「近代的時間」は「計量可能性」「抽象性」「直線性」という三つの性格において描かれてきたということである。しかしながら同時に，これら三つの性格は，時間の社会学においては異なった二つの文脈のなかで論じられていること，およびこれが問題視されるべきものだということも示された。この問題解決のために，本稿は第三に，これらの二つの文脈を架橋するものとして真木悠介の四象限図式を位置づけた。

近年の社会学では，「近代的時間」の観念が後期近代においては妥当しなくなることが様ざまな形で指摘されている。たとえばルーマンによれば，今日の社会でよく知られていることに「過去と未来の連続性が，かつて一度もなかったほど断ち切られている」（Luhmann 1992＝2003: 97）ことが挙げられる。これは「未来における現在のなかで何が生じるかは，われわれが今現在において下さねばならない決定に依存している」（Luhmann 1992＝2003: 98）ことが周知の事実となったことに対応している。すなわち，未来は過去，現在の延長上に安定的に予測されるものではなく，現在の決定に応じて多様な仕方で構成されるものだと考えられるようになったのが，今日の時間観の特徴だというのである。このルーマンの指摘をふまえていえば，今日において時間は過去，現在，未来を貫く直線的な「近代的時間」としてはもはや観念されてはいないということが導かれるだろう。

しかしながら同時に，後期近代には「近代的時間」の影響がより顕著になっている側面もある。哲学者K. アホによれば，現代社会の人びとの振る舞いは「時間的切迫感（time urgency）」――この表現自体は社会心理学者R. レヴィンのものだが――，によって特徴づけられる。この概念が指すのは，「絶えず時計に目を遣り，携帯電話をチェックし，……素早く歩き，食事をとり，交通渋滞に陥ると怒り始める。……強迫的に時間を守り，一日の流れを管理するためのリストやスケジュールに強迫的に従う」という自己のあり方である（Aho 2007: 29）。これは明らかに「時間を守る」という観念の，すなわち「近代的時間」による「時間規律（time discipline）」の，先鋭化形態として捉えることができよう（cf., Thompson 1967）。あるいは「近代的時間」に特徴的な（cf., 真木1981: 野家［1996］2005），時間が過去へと直線的に流れ去るという観念もまた，「加速化（Beschleinigung）」の進む現代社会にあっては，ますます現勢化しているといえる。過去の経験と未来への予期とがもつ信頼度の低下，および「現在」として定義されうる時間幅の収縮として規定される加速化のなかでは，時間は今まで以上に，すぐさま過去へと流れ去るものと観念されるようになっていると考えられるからである（Rosa 2003: 7; cf., Rosa 2005: 133）。われわれの社会生活にはいまだなお，「近代的時間」に強く規定されている部分がある――かつて小林秀雄が喝破したように，たとえそれが「現代に於ける最大の妄想」であるとしても（小林［1942］2003: 145）。

したがって，「近代的時間」のどのような性格が後期近代に至って変様しているのかということの解明とあわせて，「近代的時間」のどのような性格がそこにおいても変様せず，あるいはむしろ先鋭化しているのか，ということの解明もまた，時間の社会学にとって必要な研究の方途である。そうした今後の研究に対して，時間の社会学の「近代的時間」論を整理・展開した本稿はその一助となるものである。

付記

本稿は平成26年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

1) たとえば，社会学者たちが自身の社会理論のなかに時間をどのように位置づけてきたかという点からの整理や(Šubrt 2001)，時間の社会学のなかでどのようなトピックが主題化されてきたかという点からの整理などがすでになされている(Bergmann 1983)。
2) もちろん我が国の社会学における時間論はすでにいくつも存在するし（ex., 真木1981; 今津2008; 伊藤2008; 多田2013; 若林2014），他にも多数の雑誌論文が――管見の限りでは，我が国の社会学誌上では1993年の『ソシオロジ』37巻3号，2010年の『社会学評論』60巻4号，2011年の『社会学年誌』52巻において三度の時間論特集も組まれている――発表されている。いずれの研究も時間という主題を論じる上で示唆に富むものではあるが，時間の社会学の展開史を包括的に論じようとする方向性をもったものではない。
3) 社会学においては，G. H. ミードやA. シュッツの時間論がこの流れに位置づけられるとおもわれる。彼らの理論は時間問題を十分に考慮にいれた理論であるとして，時間の社会学のなかでは再評価の兆しがある。たとえばŠubrtは，彼らおよびギデンズ，ルーマン，そしてエリアスの社会理論を「時間化された社会学(temporalized sociology)」（この表現自体は[Baert 1992]のものだが）と評価している(Šubrt 2001: 218)。
4) 別の言い方をすれば，次のようにも言うことができる。すなわち，「社会学者たちは，一つの時間(*the* time)について探求するのではなく，相互に関連し，しばしば相矛盾する複数の時間(tim*es*)」(Pronovost 1989: 2)に関心を向けてきた，と。
5) この文章の主語は実際には「バリの暦(Balinese calendar)」であるが，その直後にギアーツは括弧を用いてor rather, calendarsと補っている。これをふまえて，この文章の主語を暦とした。
6) この考え方は，もとを辿れば新カント派的伝統に由来すると考えられる。新カント派は周知の通りディルタイによる精神科学(Geisteswissenschaften)と自然科学(Naturwissenschaften)との区別に立つ。その伝統のなかで時間は，これと同様の区別のもとに捉えられていたと考えられる。たとえばハイデガーは，リッケルトのもとで著された彼の初期の論考「歴史科学における時間概念」において，自然科学の時間を「同質的で量的に規定可能な性格」と規定する一方で，「歴史科学における時間の概念は，自然科学的時間概念がもつ同質的な性格をまったくもっていない」として，歴史科学の時間を質的性格において規定している(Heidegger [1916] 1978＝1996: 427–8, 435,436)。
7) それではなぜここに至って「自然と社会」の二元論が疑問視され，また既存の社会理論における時間問題の等閑視が問題視されるようになったのか。これはおそらく当時の社会的文脈や，隣接諸学の議論の布置連関なども考慮に入れたうえで問われねばならない重要な問題であるが，ここではそれを主題化することはできない。
8) 他にも同様の方向性をもった研究として，ベルクマンおよびN. エリアスの所説が挙げられる(Begmann 1983; Elias 1988＝1996)。
9) 具体的にいえば，ギデンズの批判はそれ以前の社会学の理論的な主流を成していた構造主義に向けられていた。彼によれば，構造主義が用いる共時的／通時的という区別は，一方で共時的分析が社会を「時間のないスナップ写真(timeless snapshot)」として捉えるという事態を，他方で通時的分析が「時間を社会変動と同一視する」(Giddens 1981b: 17)という事態を帰結するという(cf., Giddens 1979＝1989: 219–220; 1981a: 91)。同様にブルデューは，レヴィ＝ストロースの構造主義が実践を「脱時間化」していることを批判する（安田1998: 40）。またルーマンは，時間についての理論，とりわけルーマン以前のシステム理論が「年代記的な(chronological)」時間観を前提にしてきたことを批判している(Luhmann 1976: 148)。
10) ここではクロックタイムの規定について最も根本的と思われるふたつの性質を取り上げたが，それ以外にもクロックタイムは様ざまに規定されている。詳しくはアーリの『社会を越える社会学』を参照せよ(Urry 2000＝2006: 201)。
11) 時間を計量可能なものとしてみる考え方と，時計等の技術的発展とのあいだの関係については，社会学のみな

らず社会史などの分野にすでに厖大な蓄積がある。ここではいくつかの関連文献を指示するに留めたい（Attali 1982＝1986; Dohrn- van Rossum 1992＝1998; 橋本・栗山編2001; 西本2006）。

12) 周知の通り，このクロックタイムをそれにもとづいて近代社会が成立する根本要因として位置づけたのが，ギデンズの「時間と空間の分離」（時間の空間からの分離）の議論である(Giddens 1990＝1993)。

13) 他にも，時間と価値の問題を論ずる際には，この三つの性格をすべて考慮に入れる必要があると考えられる。W. ムーアが指摘するように「原始社会の採取民や，農業社会の農耕民にとっては時間それ自体には経済的に価値があるわけではない」(Moore 1963＝1974: 37)。だが，近代化に伴って「時間がそれ自体として価値を有するようになる」(Pronovost 1989: 28)という現象が生じる。これには，一方で時間を計量可能なモノとみなし，それを他の価値と交換することができるとする観念の発達とともに(cf, Marx [1847] 1976: 127; Thompson 1967; Giddens 1981b: 134)，他方でハサードが指摘するように，時間それ自体が「希少性(scarcity)」をもつという観念，つまり時間を直線的に過去へと流れ去る「有限なもの」として捉える観念の発達も必要であるといえる(Hassard 1990: 10)。

14) この図式に関していえば，O. ラムシュテットがこれと類似した図式を提示している。彼によれば，時間理解の仕方には歴史的にみて次の四つの類型がある。第一に「今」と「非今」のみをもつ時間理解，第二に循環的な時間理解，第三に「閉じられた未来」を伴う直線的時間理解（目的論的な時間観），第四に「開かれた未来」を伴う直線的時間理解（非目的論的な時間観）である(Rammstedt 1975: 50)。この四つの類型は，社会の機能分化の程度に応じて分類されている。第一の類型が最も機能分化の程度が低い未開社会に，第四の類型が最も機能分化した近代社会に該当するのである。ただし，ラムシュテットはこれら四つの類型を互いに独立したものとして捉えているのに対して，真木はこれら四つの類型をパターン変数として捉え，その合成体として「近代的時間」の成立を描いているという点に違いがある。

15) 上の図では，横軸は「質としての時間」―「量としての時間」となっているが，真木はこの横軸に「時間が物的な性格（抽象性）をもつものとして観念されるか否か」と，「時間が計量可能（量性）なものとして観念されるか否か」の二つの意味を込めている（cf., 真木1981: 169）

［文献］

Adam, B., 1990, *Time and Social Theory*, polity.＝1997, 伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局.

————, 1992, “Modern Times: The technology connection and its implications for social theory” *Time and Society*. 1(2): 175–191.

Aho, K., 2007, “Acceleration and Time Pathologies: The critique of psychology in Heidegger’s Beitrage” *Time & Society*, 16(1): 25–42.

Anderson, B., 1983, *Imagined Communities*, Verso.＝2007, 白石隆・白石さや訳『想像の共同体』書籍工房早山.

Attali, J., 1982, *Histoires du Temps*, Libraire Arthéme Fayard,＝1986, 蔵持不三也訳『時間の歴史』原書房.

Baert, P., 1992, *Time, Self and Social Being: Temporality Within a Social Context*. Avebury: Al-dershot.

Bergmann, W., 1983, “Das Problem der Zeit in der Soziologie: Ein Literatürüberblick zum Stand der ‘zeitsoziologischen’ Theorie und Forschung” *Versuch Einer Ontologie Der Persönlichkeit*. (35) 3: 462–504.

Bergson, H., 1889, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Presses universitaires de france.＝1975, 平井啓之訳『時間と自由』白水社.

De Grazia, S., 1974, “Time and Work”, Yaker, H., ed., 1974, *The Future of Time*, The Hogarth Press: 439–478.

Dohrn- van Rossum, G., 1992, *Die Geschichte der Stunde*, Carl Hanser Verlag.＝1998, 藤田幸一郎・岩波敦子・篠原敏昭訳『時間の歴史』大月書店.

Durkheim, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totèmique en Australie*, Paris.＝2014, 山崎亮訳『宗教生活の基本形態（上）』筑摩書房.

Elias, N., 1988, *Über die Zeit*, Schröter, M., Hrsg., Suhrkamp.＝1996, 井本晌二・青木誠之訳『時間について』法政大学出版局.

Gadéa, C., and Lallement, M., 2001, “French Sociology and Time: Origin, Development, and Current Research”, *Kronoscope*, 1 (1–2): 101–128.

Geertz, 1973, *Interpretation of Cultures*, Basic Books, Inc., Publishers.

Giddens, A., 1979, *Central Problems in Social Theory*. Univ. of California Press.＝1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社.

————, 1981a, “Time and Space in Social Theory”, Matthes, J., Hrsg., *Lebenswelt und soziale Probleme: Verhandlungen des 20. Deutschen Soziologentages in Bremen 1980*, Campus Verlag: 88–97.

————, 1981b, *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, Macmillan Press.

————, 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press.＝1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店.

————, 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press.＝1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』而立書房.

Gurvitch, G., 1964, *The Spectrum of Social Time*, Reidel.

浜日出夫, 2010,「記憶と場所：近代的時間・空間の変容」『社会学評論』, 60 (4): 465–479.

Harvey, D., 1990, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Cambridge MA.＝1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店.

橋本毅彦・栗山茂久編, 2001,『遅刻の誕生：近代日本における時間意識の形成』三元社.

Hassard, J., 1990, “Introduction: The Sociological Study of Time”, Hassard, J., ed., 1990, *The Sociology of Time*, The Macmillan Press: 1–20.

Heidegger, M., 1916, “Der Zeitbegriff in der Geschichtswissenschaft” 1978, *Gesamtausgabe*, Bd1,＝1996, 岡村信孝・丸山徳次訳「歴史科学における時間概念」『初期論文集』創文社.

————., [1927] 1993, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer＝2013, 熊野純彦訳『存在と時間 1–4』岩波書店.

Husserl, E., 1928, *Vorlefungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtfeins*, aus *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forshung*, Heidegger, M., Hrsg., Niemeyer, Halle＝1967, 立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』みすず書房.

今津孝次郎, 2008,『人生時間割の社会学』世界思想社.

伊藤美登里, 2008,『現代人と時間：もう〈みんな一緒〉ではいられない』学文社.

Kant, I., [1781, 1787] 1926, *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner.＝2012, 熊野純彦訳『純粋理性批判』作品社.

Kracauer, S., 1969, *History: The Last Things Before the Last*, Oxford Univ. Press.＝1977, 平井正訳『歴史：永遠のユダヤ人の鏡像』せりか書房.

小林秀雄, [1942] 2003,「無常という事」『小林秀雄全作品14』新潮社：142–5.

Luhmann, N., 1976, “The Future Cannot Begin: Temporal Structures in Modern Society” *Social Research*, 43 (1): 130–152.

————, 1992, *Beobachtungen der Moderne*, Wesdeutscher Verlag.＝2003, 馬場靖雄訳『近代の観察』法政大学出版局.

Lynch, K., 1972, *What Time Is This Place?* MIT Press.＝1974, 東大大谷研究室訳『時間の中の都市：内部の時間と外部の時間』鹿島出版会.

真木悠介, 1981,『時間の比較社会学』岩波書店.

Marx, K., [1847] 1976 “The Poverty of Philosophy: Answer to the Philosophy of Poverty by M. Proudhon”, *Marx Engels Collected Works 6*, Progress Publisher.＝2008, 今村仁司・三島憲一・鈴木直・塚原史・麻生博之訳「哲学の貧困」『マルクスコレクションⅡ』筑摩書房.

Moore, W., 1963, *Man, Time, and Society*, John Willey & Sons.＝1974, 丹下隆一・長田攻一訳『時間の社会学』新泉社.

Mumford, L., 1934, *Technics and Civilization*, Harcourt, Brace and Company.＝1972, 生田勉訳『技術と文明』美術出版社.

西原和久, 1998,『意味の社会学：現象学的社会学の冒険』弘文堂.

西本郁子, 2006,『時間意識の近代：「時は金なり」の社会史』法政大学出版局.

野家啓一, [1996] 2005,『物語の哲学』岩波書店.

Nowotony, H., 1992, “Time and Social Theory: Towards a social theory of time” *Time and Society*. 1(3): 421–454.

Pronovost, G., 1989, *The Sociology of Time*, SAGE.

Rammstedt, O., 1975, “Alltagsbewußtsein von Zeit” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 27: 47–63.

Rosa, H., 2003, “Social Acceleration: Ethical and Political Consequences of a Desynchronized High- Speed Society”, *Constellations*, 10(1): 3–33.

————, 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Suhrkamp.

Simmel, G., [1903] 1957, “Die Großstädte und das Geistesleben” in *Brücke und Tür: Essays des Philosophen zur Geschichte, Religion, Kunst und Gesellschaft*, Susmann, M., und Landmann, M., Hrsg., K. F. Koehler.＝2004, 酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳「大都市と精神生活」『ジンメル著作集12：橋と扉』白水社.

Sorokin, P., and Merton, R., K., 1937, “Social Time: A Methodological and Functional Analysis” *American Journal of Sociology*, 42 (5): 615–629.

Šubrt, J., 2001, “The Problem of Time from the Perspective of the Social Sciences” *Czech Sociological Review*, *9*(2), 211–224.

多田光宏，2013,『社会的世界の時間構成：社会学的現象学としての社会システム理論』ハーベスト社.

Thompson, E., P., 1967, “Time, Work- discipline and Industrial Capitalism” *Past and Present*, 38(1): 56–97.

Thrift, N., [1981] 1990, “The Making of a Capitalist Time Consciousness”, Hassard, J., ed., 1990, *The Sociology of Time*, The Macmillan Press: 105–129.

友枝敏雄，1998,『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣.

Urry, J., 1994, “Time and Memory”, Lash, S., and Urry, J., eds., 1994, *Economies of Signs and Space*, Sage Publications: 223–251.

————, 2000, *Sociology Beyond Societies*, Taylor & Francis Books Ltd., London.＝2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学』法政大学出版局.

若林幹夫，2014,『未来の社会学』河出書房新社.

Weber, M., 1919, *Wissenschaft als Beruf* in *Max Weber Gesamtausgabe. Bd. 17.* J. C. B. Mohr.＝1980, 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店.

Whorf, B., L., [1936], “An American Indian Model of the Universe” in 1956, *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, in Carroll, J., B., ed., MIT Press.＝1993, 池上嘉彦訳『言語・思考・現実』講談社.

安田尚，1998,「P. ブルデューにおける実践の論理」『上越教育大学研究紀要』17(2): 805–816.

Zerubavel, E., 1981, *Hidden Rhythms*, The Univ. of Chicago.＝1984, 木田橋美和子訳『隠れたリズム：時間の社会学』サイマル出版.

※なお，訳語は適宜変更してある.